



東京大学先端科学技術研究センター教授

西村 幸夫

「創造都市」に思う

自治体を中心に創造都市論が花盛りである。都市再生には文化戦略が欠かせないというC.ランドリーの著作の翻訳出版やITやデザインなどの創造産業にかかわる人材をいかに都市に呼び込むかということから都市の魅力を語るR.フロリダの訳書刊行によって火がついた創造都市ブームである。和書でも創造都市をタイトルに冠した書物は10冊を優に超えている。

横浜市が時限ではあるが創造都市事業本部を立ち上げたり、名古屋市がにぎわい創造都市を標榜したり、さらには文化庁が文化庁長官表彰に2007年度より文化芸術創造都市部門を設け、創造都市の表彰制度をスタートさせている。これまでに横浜市、金沢市、近江八幡市、那覇市（以上2007年度）、札幌市、東京都豊島区、篠山市、萩市（以上2008年度）が受賞している。

こうした動きは西欧や日本だけではないようで、ユネスコも2004年より文化の多様性保護の一環として創造都市ネットワークを立ち上げている。これは文学、映画、音楽、伝統工芸及びフォーク・アート、デザイン、メディア・アート、食文化の7つの分野から成っており、それぞれ分野で代表的な都市が構成員として選ばれる仕組みになっている。日本では、デザイン分野で神戸市と名古屋市が、伝統工芸及びフォーク・アート分野で金沢市がメンバーとなっている。

こうした熱狂をどうとらえればいいのか。おそらくは都市再生のための手がかりが芸術や文化にあるのではないかという自治体関係者のかすかな、（しかしあまり確信の持てない）期待があるからだろう。逆説的に言うと、在来型の中心市街地活性化施策がうまく機能していないことからくる模索の現状を反映しているともいえる。

しかし、創造都市への期待に根拠がないわけではない。都市再生や中心市街地活性化はこれまで経済的側面ばかりが強調されてきた感があるが、それでうまくいかないということは、短期の経済的収支ではなく、別の視点が必要だということを示しているともいえる。

この点で言うと、芸術や文化にはそもそもすぐに役立つといった観点ははじめから存在しない分、腹が据わっている。それに都市の「魅力」という説明しがたい感覚は、芸術や文化の側面から見るとあまり言葉を尽くさなくてもわかるというものである。それは魅力的な人物がなぜ魅力的なのかなど、説明するよりも実感する方がたやすいに決まっていることから明らかだ。

建築もそうした魅力に寄与するものであってほしい。それは創造都市の姿を表現するとともに、創造的再生の源泉ともなるものだからだ。